

インタビュー急接近

急接近：高橋克彦さん 世界文化遺産「平泉」の魅力とは？

<KEY PERSON INTERVIEW>

「平泉」(岩手県平泉町)が世界文化遺産に登録された。大震災の被災地には希望の灯になったが、その本当の魅力とはどういうものなのか。地元で居を構え、東北の歴史を書き続けている高橋克彦さんに聞いた。【聞き手・重里徹也論説委員】

◇歴史と心を見てほしいー作家・高橋克彦さん(64)

ー世界文化遺産登録が決まったの感想はいかがですか。

◆ これはもう、素直にうれしいというしかありません。大震災で世界の関心が集まり、被災地の人々の優しく整然とした姿が海外に伝わったのが、いいように働いたと考えます。

ー平泉でお好きな場所がありますか。

◆ 戦乱で建物があまり残っておらず、その跡地を見て、かつての姿を想像するしかありません。芭蕉(俳諧紀行「奥の細道」で訪れた俳人)も、そうだったのでしょう。でも、平泉へ行くと必ず、月見坂(中尊寺の参道)の途中にある見晴らし台からの風景を楽しみます。衣川や北上川、東稲山(たばしねやま)が眺められる。坂を上るのは年々、きつくなってきましたが、あの景色は見たくなります。

ー平泉の魅力をどんなふうにお考えですか。

◆ 大切なのはモノではなくて、平泉を造った藤原清衡(きよひら)(奥州藤原氏の初代)の理想だと思ふのです。彼が中尊寺を建立した背景には、鳥も獣も人間も、生きとし生けるもの、すべて平等だという浄土思想があったのだと思ふのです。為政者がそんな思いを持つというのは、世界史的に見ても稀有(けう)なことではないでしょうか。

ー歴史や思想を踏まえるのが大切ということでしょうか。

◆ 毛越(もうつう)寺などに人を案内して、さあ、どうです、という胸の張り方は僕にはありません。平泉の歴史とそれを造った奥州藤原氏の理想が、東北に生きる僕を励ましてくれる。僕にとって平泉とは、心の中にあるものなんです。

ー高橋さんの長編小説「炎(ほむら)立つ」(全5巻、講談社文庫)には11世紀半ばから12世紀末までの陸奥の歴史が描かれています。前九年の役、後三年の役を経て、奥州藤原氏4代の栄華と滅亡がたどられます。藤原清衡の懐の深い肖像が独特でした。

◆ 最も苦勞した人物でした。史料がほとんど残っていません。「陸奥話記」(前九年の役を描いた軍記物語)には出てきますがよくわからない。ある程度、キャラクターをつくってから歴史の中に飛び

込ませていくのが、僕の小説の書き方です。でも、清衡は自分の中にいる、いろいろな人物のどれにもあてはまらない。

――視野の広い人です。

◆ これは、書いている時はわからなかったのですが、今となって振り返ると、あの時代に唯一、清衡は現代人の感覚を持っていたと思うのです。当時の価値観を超えた人物ですね。

――複雑な生い立ちです。

◆ 子供の頃に父親を殺され、母親は敵方の妻になる。義理の兄と腹違いの弟がいた。世の中に出不来ない環境で育った。自分は蝦夷(えみし)(中央政権にまつろわなかった奥州などの人々)の民と同じだと、ずっと思っていたでしょう。この経緯が彼をつくったのでしょうか。

――黄金や馬、刀など、豊かな経済力がその背景にあった。

◆ 清衡ですごいのは極力、戦争を避けようとするところです。中央が東北支配をしようとする時代に、陸奥を守るには、戦争を仕掛けられないようにする必要があります。しきりに寺を建設し、中央の最先端の技術を集め、僧侶を通して知識や学問を摂取しました。

◇東北人の誇りを回復

――平泉の政治システムが鎌倉幕府に影響を及ぼしたというのも面白かったです。

◆ 幕府を運営していくのに、平家のやり方は参考にならない。どうすればいいかと考えた時に、平泉の治世から大いに学んだのだと推測します。史料があるわけではないのですが。

――今後、平泉をどのように生かせばいいでしょうか。

◆ 今の観光客は「物」を見に来る方々がほとんど。でも、建物を表面的に見ても、どれだけ感動するでしょうか。900年以上前に、平等や平和を高らかに標榜(ひょうぼう)した。その「心」を後世に伝えていきたい。東北に生まれ育った体験から言うと、文化が低いと言われ、コンプレックスを抱えさせられて生きてきたわけです。ズーズー弁だと笑われたり、岩手県出身だと胸を張って言えない思いもあった。それを払拭(ふっしょく)させる力を県民は平泉に期待しています。

――大震災から5カ月半になりますが、復興のスピードが遅いように思います。

◆ 政治にはほとんど期待していません。中央に頼っていると、その分、復興が遅れるでしょう。自分たちの力でやるしかありません。平泉の心が、今も東北人の中に生きていることを実感することがあります。たとえば、津波のために両親を失った中学生の少年が「自分よりつらい思いをしている人がいます」とテレビで話しているのを見ました。彼よりつらい人なんて、いないですよ。それなのに、他人のことを思いやっている。戦国時代以来、東北人は誇りをズタズタにされ続けてきましたが、心の中には蝦夷の精神が生きているんだと元気づけられました。

=====

■ことば

◇世界文化遺産「平泉」

平安末期(12世紀)に栄えた奥州藤原氏の都。阿弥陀仏によって万民が救済されるという浄土思想に基づき、平和な理想郷としてつくられたといわれる。6月に登録されたのは金色堂が名高い中尊寺、庭園が有名な毛越寺、平泉の空間設計の基準となった金鶏山など、五つの資産。仏教と日本独特の自然信仰が融合していると評価された。

=====

■人物略歴

◇たかはし・かつひこ

1947年、岩手県釜石市生まれ。早大卒。「炎立つ」以外の代表作に坂上田村麻呂と戦うアテルイを描いた「火怨」(吉川英治文学賞)、奈良時代の奥州の争乱を描いた「風の陣」、「時宗」、「緋い記憶」(直木賞)など。盛岡市在住。

毎日新聞 2011年8月27日 東京朝刊